

原告団

遺族・CO裁
判、災害責任
追及、特集号
第百十二号

原告団レポート

CO患者——

竹村勝三さん

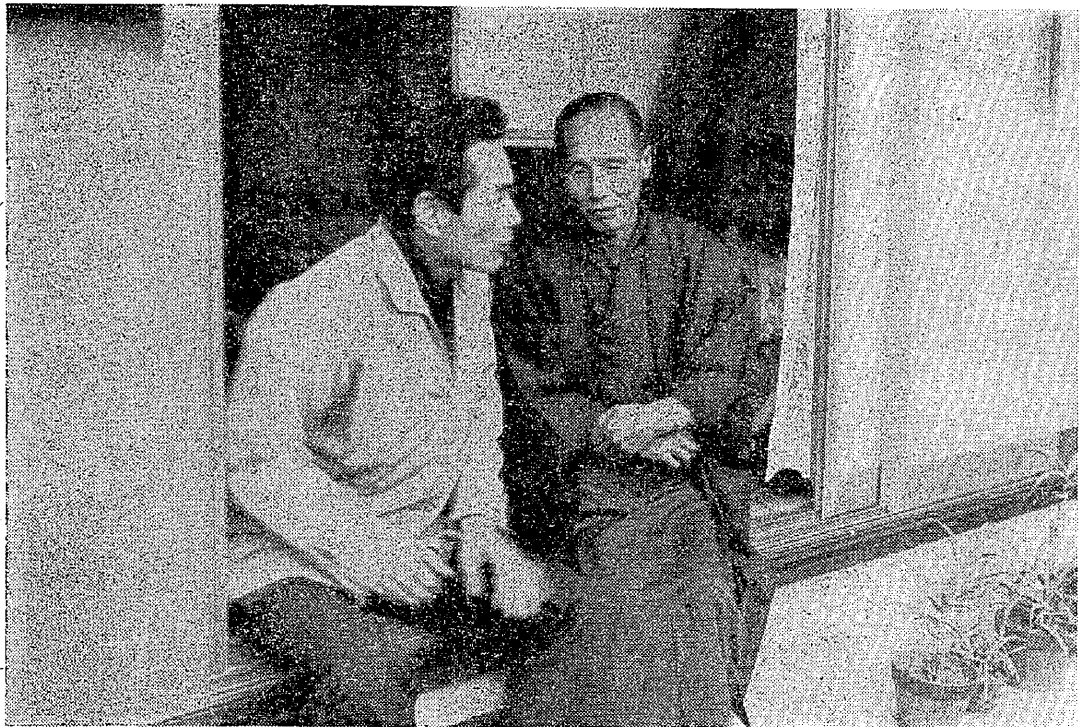
恐怖の手記

「十九日午後、あの日からちよ
うと十日目に退院した。腰から下
のしびれが残っていて、足はまだ
完全に自分のものではなかった。
頭も重い。だが、もうこれ以上
病院に寝ていることは耐えられな
かった。付添いの妻たちは決して
口にしなかったが、だからとも
なく病室で死んだ仲間の名前が伝
わり、それが目を追ってふえてい
った。」

一酸化炭素中毒で記憶を失い
かけている同僚もそばにいる。私
は「人の運命」のおそろしさにじ
っとおれなくなった。

一酸化炭素中毒には後遺症の心
配もあると聞く。意識が回復して
よくならなかったと思ったら、だん
だん記憶力が弱まっていく仲間。
さらに精神病棟へ移される者もで
はじめた。

「帰らせてください。家で子ど
もたち相手に冗談でもいってれ
ば、きっとよくなると思います。」



写真上は、久しぶりに竹村さんの家をたず
ねた患者 仲間の 江崎 治己 さん(新港作業
所)と、うれしいひととき。下は満州の畜
産技手時代の面影(まんなかの人)。すつ
かり変ってしまった人柄。



一日でも長生きして

妻の願いにささえられて生きる日々

置き忘れられた昔の人柄

たのである。

未認定患者

竹村さんは未認定患者である。
障害等級がまだまわっていないの
だ。

すでに老境

竹村さんの住まいは、大牟田市
明治町三丁目一四四。妻のマス
エさんと二人だけの暮らしだ。

几帳面さ

見たところ、人一倍優秀そうな
彼の表情のどこに、そんな根性か
あるのだろうか、と疑わすにはい
られないが、竹村さんはあの三池
闘争はもうほんのりとした、その後
に三池労組の組織切り崩しをね
らった、資本の恐るべき差別攻撃
にもついに屈することなく闘い抜
いた人である。

この文の初めに引用したその手
記がうかがわれるように、彼は生
活全般につけ几帳面さで、満洲時代
一抑留時代をたぬき、大爆発で
被災する直前まで克明にその日
の日記を書き続けたとい

係のお医者さんで、
逃げるように病院をでた」

右の文は、CO患者——竹村勝
三さんが、昭和三十八年十一月二
十五日発行の「朝日新聞」の夕刊
に寄せている手記だ。

第百十二号

「うまでもなくその月の九日に
起きた三川鉱山大爆発の際被
災、思いも寄らずCO患者と呼ば
れる身になってしまった彼。その
当時、胸のなかに日まじに広がっ
ていくCO中毒症への恐れが、手
記の行間ににじみ出ていて読む者
をひきつける。」

狂った人生

竹村さんは、仕練士の一人とし
て三川鉱山の坑底で働いていた。
その日は一番方だった。そして
被災してしまったのだが、彼は初
池の坑内にもぐった。その間、落
村勝三さんの人生は狂ってしまった

気がついたとき、私は救助隊の
タンカの上にいた。はじめて自分
が事故にあったことを知った。
「きょう一日、お願いします」と
祈ってから下がったのに……」
はからずもこの被災のため、竹
村勝三さんの人生は狂ってしまった

だが、相手がガスではどうしよ
うもない。あの日も私たちは、い
つものように坑口のヤマの神社に
「きょう一日、お願いします」と
祈ってから下がったのに……」
はからずもこの被災のため、竹
村勝三さんの人生は狂ってしまった

「疲れ易く、多幸的で、愛動的
で、人格の平均化あり。手指の振
戦、筋緊張亢進、発汗過多」
今は、ともあれ政府からの障害
等級決定通知を待つ身である。

炭鉱に入社した翌年の八月二
十三日、縁あって今もつれ添って
いる妻のマスエさんと結ばれる。
竹村さんが二十七、マスエさんが
二十五のときのことだった。

家族は、父母ともすでに亡く、
子どもが三人。
長男・修一さん。二十七歳。京
浜急行に勤務。
長女・敏子さん。二十五歳。他
家へ嫁ぎ、早や子どもが一人。
次男・文男さん。二十一歳。西
鉄福岡に勤務。

思えば、竹村さんも五十六歳で
定年のため昨年、多くの思い出を
残しながら三池炭鉱を退職。妻の
マスエさんも、五十四歳。あつと
いう間に、一歩老境へ足を踏み入
れているのである。

でも仕事は、装飾用に使われると
いう竹村さんが精いっぱいだった
のである。それも午前中だけの勤
務が終れば、午後は自宅に帰り静
養を必要とする日常だった。もっ
とも三池労組の闘いが、それで一
日分の賃金を補償させてはきたの
だが、思えば、三池闘争を闘い抜
いた不屈の人、差別に抗しながら
抗道進進などに体をなすきた労
働者の、大爆発後の生きざまがこ
れなのである。「せめて一日でも
長生きしてもらいたいことだけだ
す」と、マスエさんは語るが、ま
た彼も生きねばならぬのだ。その
ことを裁判闘争が求めている。

長く生きて

ふいと、頭をたぐりてくるもの
忘れ。今、品物を自分の手で置い
た場所がわからなくなり、とんで
もないところを探しまわることが
日常茶飯時のことだ。

ものを取り落とす。新聞を読も
うとすれば、度の強い、でっかい
虫メガネを要する。日記をしたた
めとる話ではない。

乗りの酔いがひどい。バスで
ちよっとそとまでかけてきえ、
ぐったり。隣りの柳川市にある、
亡き両親の墓参りにも、一度いっ
たり。電車で酔って、やとわ
が家に着いたとたん寝てしまっ
たのだから。家で過ごすのが一番
だ。とはいえ、たとえどんなに寒
くても、石油ストーブを燃やすこ
とは禁もつ。電気コタツのスイッ
チさえ、すぐ切ってしまう。頭が
フラフラしはじめてくるからだ。

竹村さんは退職する日まで、職
場復帰した万田作業所で、CO患
者仲間といっしょに働いてきた。
でも仕事は、装飾用に使われると
いう竹村さんが精いっぱいだった
のである。それも午前中だけの勤
務が終れば、午後は自宅に帰り静
養を必要とする日常だった。もっ
とも三池労組の闘いが、それで一
日分の賃金を補償させてはきたの
だが、思えば、三池闘争を闘い抜
いた不屈の人、差別に抗しながら
抗道進進などに体をなすきた労
働者の、大爆発後の生きざまがこ
れなのである。「せめて一日でも
長生きしてもらいたいことだけだ
す」と、マスエさんは語るが、ま
た彼も生きねばならぬのだ。その
ことを裁判闘争が求めている。

妻の願いにささえられて生きる日々

置き忘れられた昔の人柄

一日でも長生きして

恐怖の手記

原告団レポート

原告団

遺族・CO裁
判、災害責任
追及、特集号
第百十二号